三重県埋蔵文化財調査報告158

森ノ上遺跡発掘調査報告

－三重県多気郡大台町柳原－

1997・3

三重県埋蔵文化財センター

序

自動車輸送体系の発達した今日、道路網の整備は南北に長い県土を有する三重県にとって最重要課題のひとつとして挙げられましょう。

しかし、歴史や文化の足跡を知る上で重要な資料となる文化財の保護も行政に求められる役割として欠くことのできないものであります。

このような中で、道路整備の円滑と文化財保護との整合を図るため埋蔵文化財の保護については止むを得ず事前に発掘調査を実施し、その内容や実態について写真・図面等の記録による保存に留めているところであります。

今回報告させていただきます「森ノ上遺跡」もこのような埋蔵文化財のひとつで、多気町相鹿瀬と大台町新田を結ぶ県道の拡幅改良事業に伴って発掘調査を実施したものであります。調査範囲は道路の拡幅部分に限られ、遺跡の全容を解明するには至っていませんが、地域の歴史を知る上でその一助となるものと確信しております。

文末となりましたが、調査の実施に当たりご協力賜りました三重県土木部道路建設課、同松阪土木事務所、大台町教育委員会、管内文化財調査員各位並びに地元各位に感謝申し上げて刊行のご挨拶とさせていただきます。

平成９年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　奥村敏夫

例　　言

1　本書は三重県多気郡大台町柳原字森ノ上に所在する森ノ上（もりのうえ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の調査は平成８年度県道相鹿瀬大台線道路改良事業に伴い、三重県教育委員会が三重県土木部から経費の執行委任を受けて実施した。

3　調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課

主事　松葉和也　　臨時技術補助員　山田康博

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　管理指導課

4　調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、松阪土木事務所、大台町教育委員会、地元柳原・千代の方々、無量山千福寺からの協力を得た。

5　本書の執筆・写真撮影および作成は松葉が行った。なお、図面作成等は管理指導課の協力を得た。

6　本書の方位は真北を用いた。なお、磁北方位は、西偏約６度20分（平成元年、国土地理院）である。

7　本書で用いた遺構表示略記号は以下による。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑

8　当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　前言……1
Ⅱ　位置と環境……2
Ⅲ　調査の成果……4
Ⅳ　結語……13

挿図目次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　遺跡地形図……4
第３図　調査区位置図……5
第４図　調査区遺構平面図……6
第５図　調査区土層断面図……7
第６図　ＳＢ18～20実測図……9
第７図　ＳＫ１・ＳＫ５・ＳＫ７・ＳＫ８・ＳＫ11・ＳＫ13・ＳＫ16実測図……9
第８図　出土遺物実測図……11

表目次

第１表　土坑一覧表……10
第２表　掘立柱建物一覧表……11
第３表　遺物一覧表……12

写真目次

調査区全景（南から）……14
Ａ地区全景（北から）……14
Ｂ地区全景（北から）……14
Ｃ地区全景（北から）……14
Ａ地区掘立柱建物（北から）……15
ＳＫ１（北から）……15
ＳＫ７（北から）……15
ＳＫ８（北から）……15
ＳＫ16（北から）……15
出土遺物……16

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

森ノ上遺跡は、平成８年度一般県道相鹿瀬大台線県単道路改良事業に先立つ遺跡分布調査によって発見された遺跡である。当事業は遺跡範囲内を破壊する恐れがあったため、平成８年２月１日に試掘調査（第３図）を行った。その結果、試掘坑１・２で遺構と遺物が確認された。試掘坑３～５については遺構等は確認できなかったものの、土層堆積状況、遺物の散布状況から遺跡範囲内と判断した。土木部との協議でも遺跡の破壊は避けられないという結論に至り、本調査を行う事になった。

また、調査区の南に接する場所については本調査開始時の平成８年５月７日に試掘調査を行った。試掘坑６・７ともに遺構と遺物は認められず、地山まで削平されていることが分かった。

2　調査の経過

（1）調査経過概要

今回の調査は、県道の歩道取り付けにより掘削される畑地と宅地の部分（約４ｍ×約108ｍ）について実施した。なお、交差する現道部分については調査から除外した。

調査に参加したのは、地元の柳原・千代の方々である。ここにお名前を記し、御礼申し上げる。

大北誠子、大北のぶ子、大北洋子、北村敏子、竹本美津野、田中三千代、辻久雄、辻八重子、辻本つた子、西岡隆男、長谷川昌夫、本多志げ代、山本弘　　（50音順、敬称略）

（2）調査日誌（抄）

５月７日　Ａ・Ｃ地区の表土掘削をした。遺物の包含量は少ない。試掘を２ヶ所行った。

９日　Ｂ地区の表土掘削をしたが、遺物は確認できなかった。遺跡範囲確認のために分布調査を行った。遺物の散布は広範囲にわたることが分かった。

13日　Ａ地区の南より検出作業を開始する。ピット、土坑を確認した。また、土師器の鍋・皿、山茶椀が出土した。

14日　Ａ地区の検出。遺構掘削を始める。ＳＫ１より土師器鍋出土。

15日　ＳＫ１内に石を多数確認する。ＳＫ７・ＳＫ８は土坑墓の可能性もある。

16日　Ａ地区掘削終了。Ｂ地区の検出開始。

20日　ＳＫ１３・ＳＫ１４を検出する。

24日　Ｂ地区の掘削開始。Ｃ地区の検出。ともに遺物の量は少ない。

28日　掘削終了。

30日　写真撮影。

31日　地元の日進小学校６年生２１人見学。

６月１日　地元対象の現地説明会を開催。５０人以上の参加を得る。

３日　遺構実測。

７日　遺構実測その他作業終了。道具などを撤収する。

８日　現地引き渡し。

（3）文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

・法98条の２第１項（文化庁長官あて）

平成８年４月５日付教文第206号（県教育長通知）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）

平成８年６月24日付教文第31－17号（県教育長通知）

II　位置と環境

三重と奈良の県境、台高山脈を源流に持つ宮川は全長約91kmに及ぶ県内一の河川である。本流は、大内山川・濁川・注連指川・一之瀬川等の支流を集め、ほぼ東流しつつ伊勢湾に注いでいる。

支流の濁川が合流する一帯は、河岸段丘がよく発達しており、遺跡の分布も段丘面上に集中する傾向にある。

森ノ上遺跡（1）は、宮川の左岸、濁川の合流地点から1.5kmほど下った場所に位置している。ここは南と北に小さな谷が入り、川に向かって東に小さく張り出した段丘となっている。その段丘の先端部にあたる場所には、無量山千福寺（通称柳原観音）がある。この寺の境内には、柳原観音境内遺跡（2）が確認されている。

宮川流域は旧石器時代の遺跡が多く、県内の半数以上がこの地域に集中している。この中でも、大台町出張遺跡（3）は玉城町カリコ遺跡とともに県内有数の旧石器時代の遺跡として知られている。1976年から翌年にかけて行われた発掘調査では、ナイフ形石器・スクレイパーをはじめとする遺物が2万点以上出土している。他には大台町中野遺跡（4）、同町黒ヶ谷遺跡（5）、同町宮野西出遺跡（6）からナイフ形石器等の旧石器時代の遺物が出土している。また、出張遺跡、中野遺跡、宮野西出遺跡では、旧石器時代末から縄文時代初頭にかけての木葉形尖頭器や有茎尖頭器も出土している。なお、今回の調査中に、前述の柳原観音境内遺跡でもチャート製の石器剥片を表面採取しており、本遺跡にも先史時代の遺構・遺物が存在する可能性もある。

縄文時代になると、遺跡の数はさらに増加する。勢和村石神遺跡（7）では、前述の木葉形尖頭器や有茎尖頭器の他、神子柴型に属すると思われる石斧等の草創期に特有な石器が出土している。早期では、度会町栢垣外遺跡（8）の遺物が比較的多い。早期末から前期初頭は、県内でも遺跡の数が減少する時期である。その中でも岡ヶ野遺跡（9）は、少量ではあるが早期末の土器が出土している。前期の遺跡では、深谷東遺跡（10）から、北白川下層II式に比定できる土器が出土している。また、度会町万野遺跡は前期の遺物が多い遺跡として知られている。中期は、遺跡の数も多くなり、前述の出張遺跡、岡ヶ野遺跡、深谷東遺跡等から遺物が出土しているが、出土量は少ない。後期では、度会町森添遺跡が知られている。1986年と翌年に発掘調査が行われ、元住吉II式等の土器が出土している。元住吉II式以降、晩期後半までの土器の中には、朱が塗彩または付着したものも認められている。晩期では森添遺跡の他に、勢和村池ノ谷遺跡（11）の出土量が多い。池ノ谷遺跡は、有茎尖頭器を始めとする縄文時代各時期の遺物が出土している。1994年に範囲確認調査が行われ、朱の付着した磨石や土器が出土した[①]。朱の原料である辰砂も見つかっており、朱の生産遺跡としての性格付けがされている。

弥生時代になると、遺跡の分布の中心は下流域に移っていく。当該地域では前期の遺跡は、濁川流域を中心に散在する程度である。大宮町引瀬遺跡（12）、大台町浜井場遺跡（13）、岡ヶ野遺跡、池ノ谷遺跡等である。中期には、上流域の遺跡もいくつか見られるようになる。大宮町長者野遺跡では、中期の土器が多く採集されている。後期では、下流域に玉城町小社遺跡がある。この遺跡では、山中期・欠山期までの土器が出土している。

古墳時代では、後期の落人古墳群（14）がある。3基の円墳だということであるが、詳細は不明である。また、前述の長者野遺跡に重複して長者野古墳群が確認されている。

多気町の逢鹿瀬廃寺（15）は、本遺跡から下流に2kmほどに所在する。奈良時代の瓦が確認されている。なお、同廃寺は、伊勢大神宮寺であるとする説が主流となっている。西谷遺跡（16）は同廃寺への瓦の供給源とされる瓦窯跡である[②]。

古代、多気郡は度会郡・飯野郡とともに神三郡として伊勢神宮の所領となっていた。その後中世になると、北畠氏の南伊勢への進攻にともなって多気郡も北畠氏の勢力範囲に入った。大台町内にも北畠氏に関係のある城館をいくつか数えることができる。

北畠具教三瀬館（三瀬御所）や下三瀬砦などである。中世以降の集落跡は、宮川の両岸に点在する傾向にある。これらは現在の集落と重複することが多いが、川と山の間の狭い中位段丘という地形から考えれば当然のことであろう。本遺跡も、こういった集落跡の一つとしてとらえる事ができる。

ここで無量山千福寺について若干触れておく。千福寺は現在、安産祈願等で近隣に知られており、また月に一度の縁日、年に二度の大縁日では大変な賑わいを見せている。近世には伊勢参宮と西国三十三カ所巡礼が結びつき、熊野街道沿いにある柳原集落を通過する人の数が多くなった。寛政２年（1790年）の道中記や、文政12年（1829年）の巡礼案内記には千福寺の記述が見られる[3]。千福寺は焼失・移転をしており、寺記類も残っておらず、近世以前についてはいくつかの口伝の他は不明なことが多い。

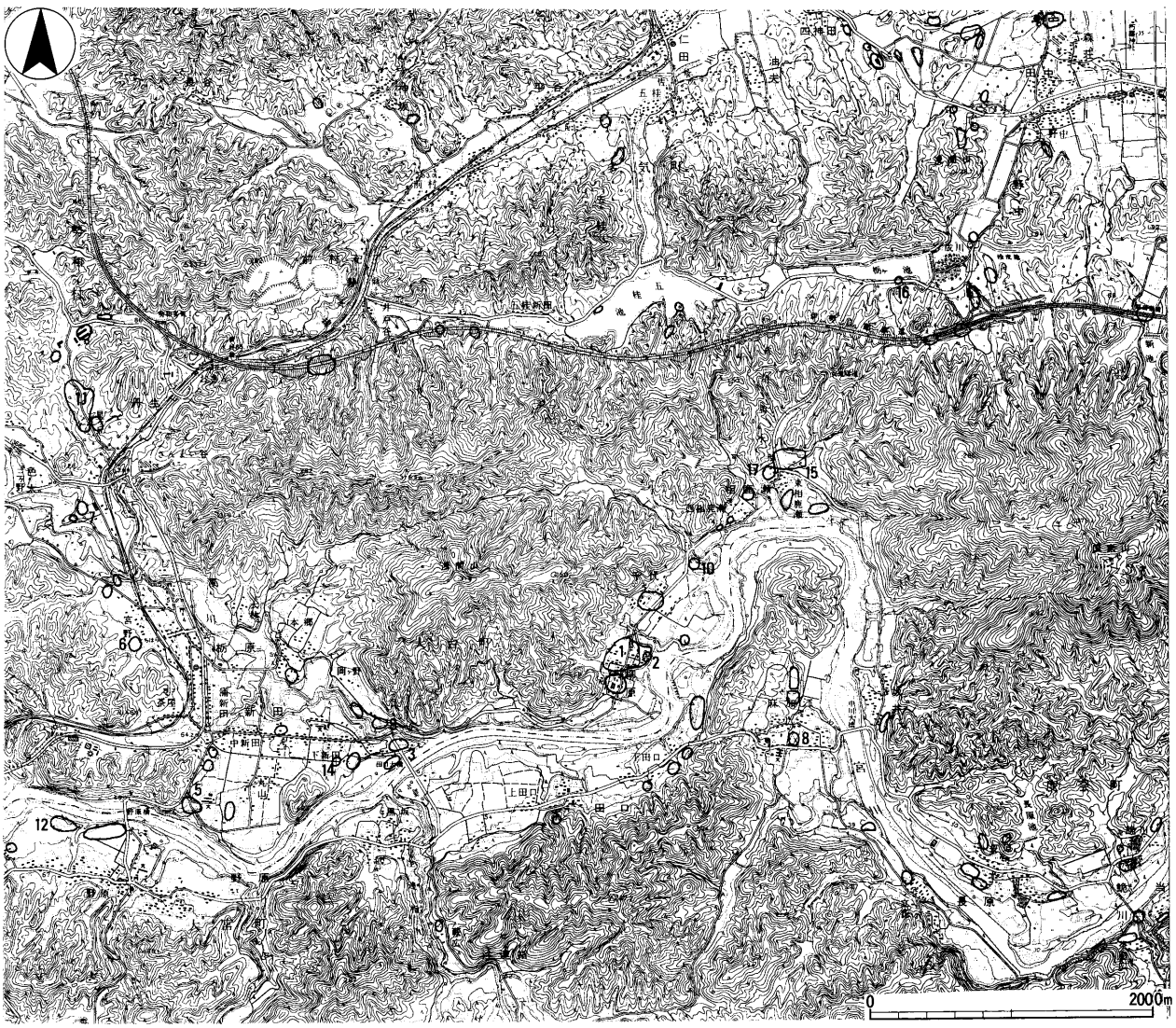
［註・参考文献］

① 奥　義次「池ノ谷遺跡範囲確認調査報告」（『勢和村遺跡地図』付篇Ⅱ、勢和村教育委員会、1995年）

② 川北秀実「西谷遺跡（栃ヶ谷瓦窯）・逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺採集瓦の同笵関係と想定される供給パターン」（『Miehistory』vol.7、三重歴史文化研究会、1994年）。

③ 田中智彦「西国巡礼の始点と終点」（『紀要』16、神戸大学文学部、1989年）。

上記の他、皇学館大学考古学研究会『大台町の遺跡』（大台町教育委員会、1975年）を参照した。



第１図　遺跡位置図（1:50,000）　　国土地理院「国東山」(1:25,000）から

III　調査の成果

1　調査の方法

本遺跡の調査では、南側よりA地区・B地区・C地区を設定して行った。本来は連続するものであるが、生活道路確保のために分割をした。3地区とも近接しているため、小地区設定は通し番号で行っている。小地区は4m四方で、その番号は西から東へa・b・c、北から南へ1～28である。

2　基本層序

本遺跡は、狭い中位段丘上に立地している。現状は茶畑と宅地であり、茶の根や住宅建設に伴う掘削等の撹乱を受けている。基本層序は次のとおりである。

I　暗褐色土（耕作土）

II　黒褐色土

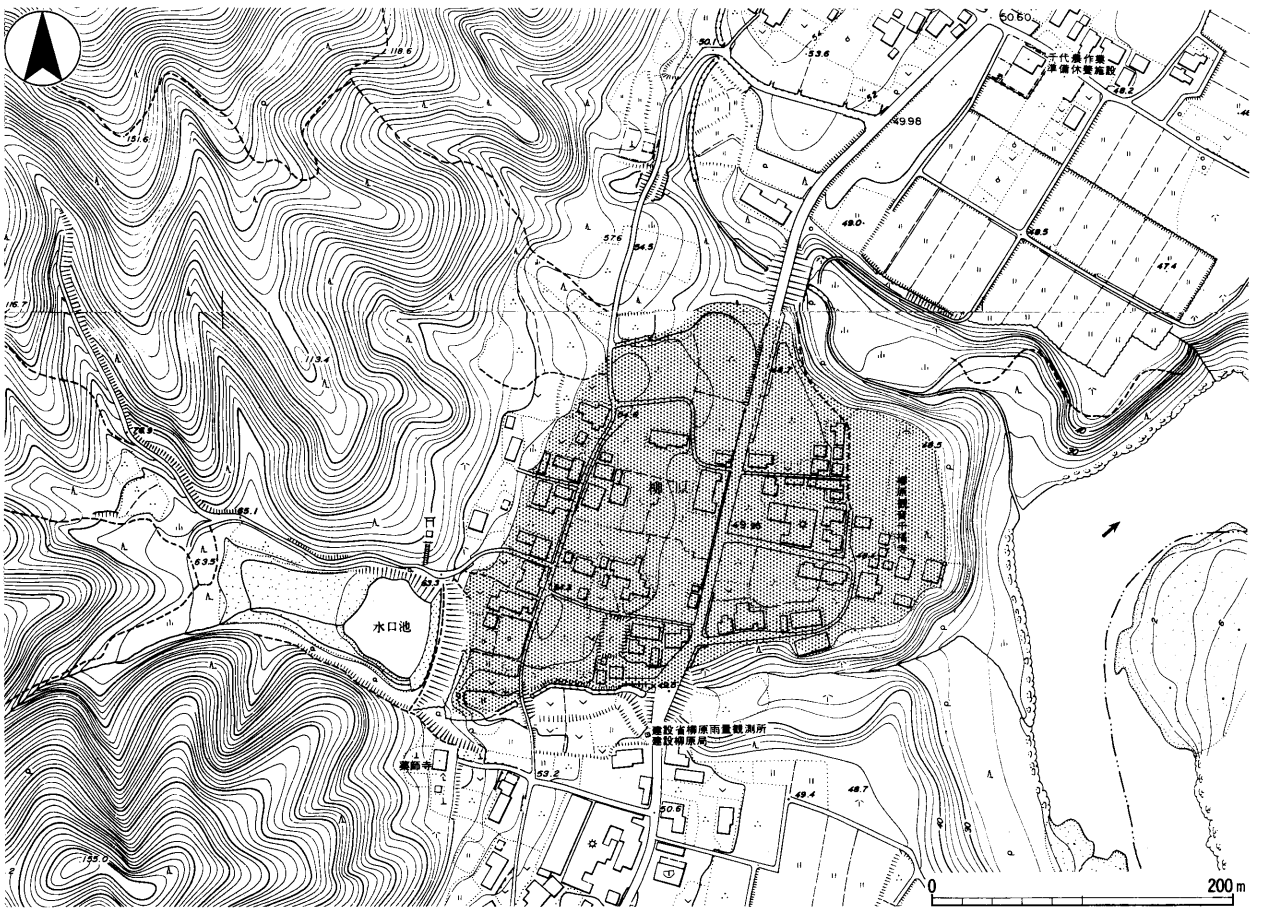
III　灰褐色土＋黄褐色土小ブロック

IV　黄褐色粘質土＋砂礫混入

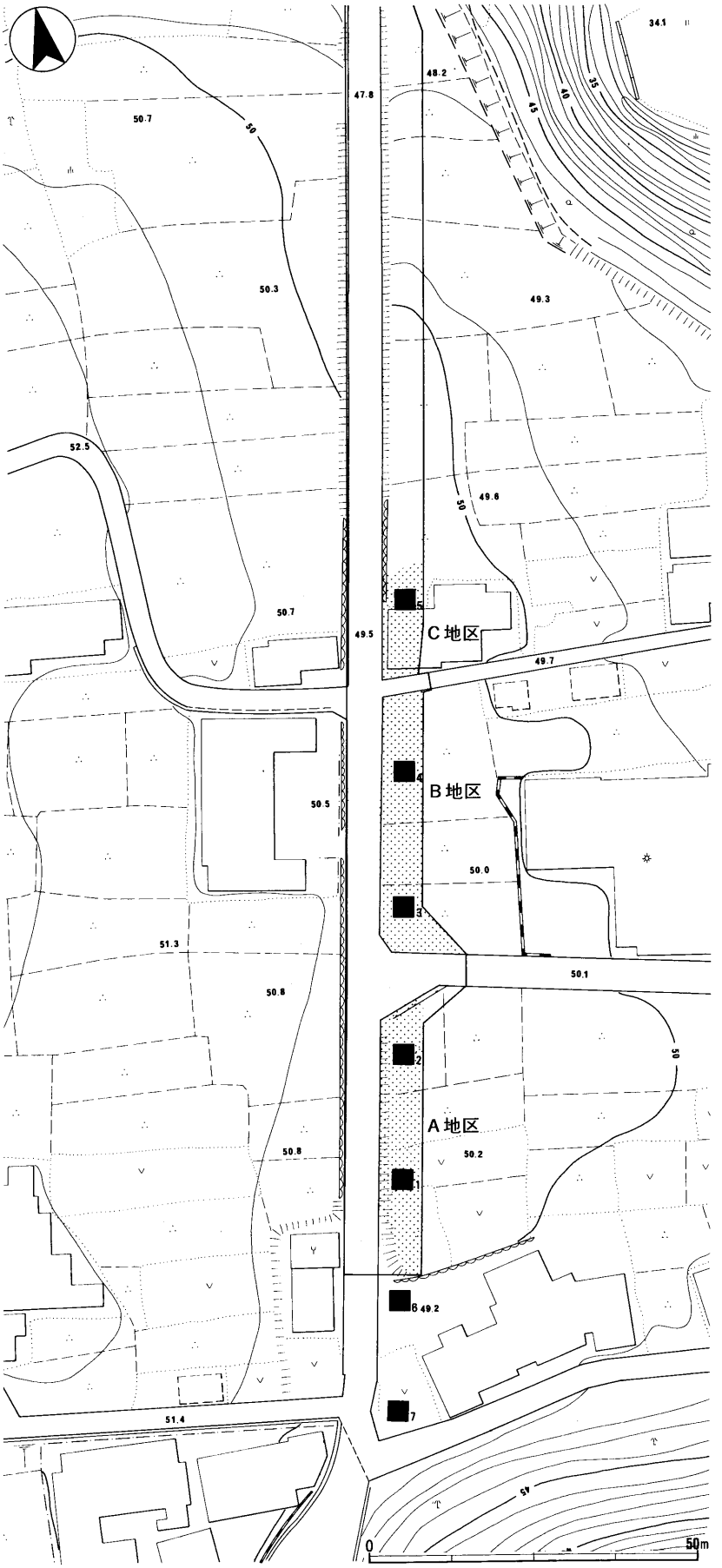
上記の層序は、A・B地区の全面にわたって確認できる。C地区は家屋が建っていたためにかなりの撹乱を受けており、基本層序どおりではない。

II・IIIは包含層で、中近世の土師器片が認められた。遺構検出はIVの上面で行ったが、IIとIIIの上面から切り込んでいる遺構が多く、少なくとも2つの生活面が考えられる。

本遺跡が中位段丘面上に位置することは前述の通りである。この付近の中位段丘は黒褐色土がよく発達する傾向にあり、また、その下位には黄褐色砂質土があることが一般的である。同じような中位段丘面は、大台町中新田・下新田にある海抜50～60mの平坦面、度会町上田口付近の海抜50mの平坦面など



第2図　遺跡地形図（1:5,000）



第3図　調査区位置図（1:1,000）

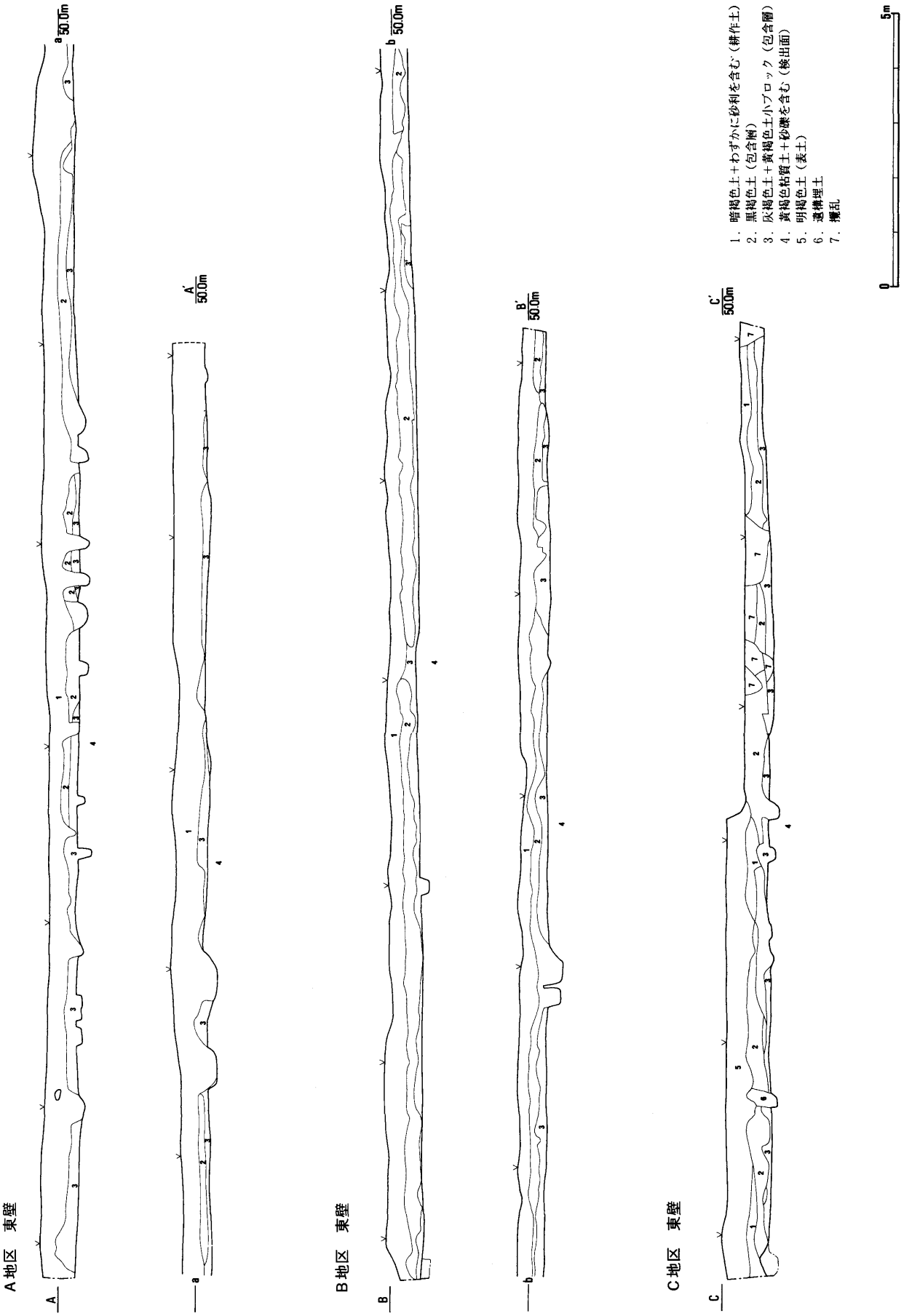
である①。

今回の調査においても、この付近の中位段丘上での一般的な層位が認められたといってよいだろう。

なお、前述の大台町出張遺跡では、黄褐色砂質土から旧石器時代の石器群が出土しており②、今回の調査でもⅣ層中の遺物の有無についても確認をした。本遺跡では遺物は認められなかったが、多気町内垣外遺跡［第1図(17)］では黄褐色土層中より旧石器時代のものと考えられる石器群が出土している。また、この層の直上には火山灰と思われる層がある③。今後の当該地域の調査では、黄褐色土、いわゆる地山としている層中の遺物の有無に注意を払うとともに、火山灰層の有無についても確認の必要がある。

調査区内の単独数字はピット番号。
調査区外の破線はグリッド枠を表す。

第4図　調査区遺構平面図（1:200）



第5図　調査区土層断面図（1:100）

3　遺構

１５０ほどのピットの内、掘立柱建物としてまとまったものが３棟ある。また、遺構番号を付けた土坑は21基ある。この中には時期が不明なものもあるが、時期が推測できるものについては、主に中世の遺構であると考えられる。なお、年代観は伊藤裕偉氏の南伊勢系土師器鍋・皿の編年[4]（以下「伊藤編年」）に従っている。

（１）掘立柱建物

掘立柱建物を３棟確認した。調査区の横幅が４ｍほどという制約を受けるために、全てが建物の一部分を確認したにとどまっている。３棟ともにＡ地区北半分に位置している。

なお、柱間の長さは曲尺（１尺＝約30.3㎝）で測っている。

ＳＢ18（第６図）　調査区外へのびるため、定かではないが桁行４間（６尺×４＝24尺）×梁行１間（６尺）以上の総柱の建物と考えられる。南北棟と思われ、棟方向はＮ２°Ｅである。確認された８か所の柱位置のうち４か所に根石が残っていた。北面西から２つめと南西隅の柱穴からそれぞれ土師器鍋が出土した。伊藤編年３段階並行のものと思われ、建物の実年代は15世紀始めを中心とする時期と考えられる。

ＳＢ19（第６図）　ＳＢ18に重複して建っている。一部分の検出のため、定かではないが桁行４間（北から５尺×２＋４尺＋５尺＝19尺）×梁行１間（6.5尺）以上の総柱の建物と考えられる。棟方向Ｎ３°Ｅの南北棟と思われ、棟方向はＳＢ18とほぼ同じである。確認された８か所の柱位置のうち３か所に根石が残っていた。出土した土師器鍋片は伊藤編年３段階並行のものである可能性があるが、ＳＢ18のものより若干新しいと思われる。したがって、ＳＢ18が廃絶した後、ＳＢ19が建てられたものと理解しておきたい。

ＳＢ20（第６図）　ＳＢ18・ＳＢ19に重複している。一部分しか確認できないが、桁行１間（6.5尺）以上×梁行２間（５尺×２＝10尺）の建物と考えられる。棟方向N78°Wの東西棟と思われる。確認された４か所の柱位置のうち３か所に根石が残っていた。土師器片が出土しているが、前述の２棟と同じ伊藤編年３段階並行のものと思われる。ＳＢ18のものより若干新しいと思われるが、ＳＢ19との新旧関係は不明である。

（２）土坑

土坑として扱っているものは22基ある。総じて遺物量が少なく、時期の不明なものが多い。なお、土坑としたが、中世墓である可能性のあるものも含まれている。以下には遺構図を掲載したもののみ記述する。その他は遺構一覧表を参照されたい。

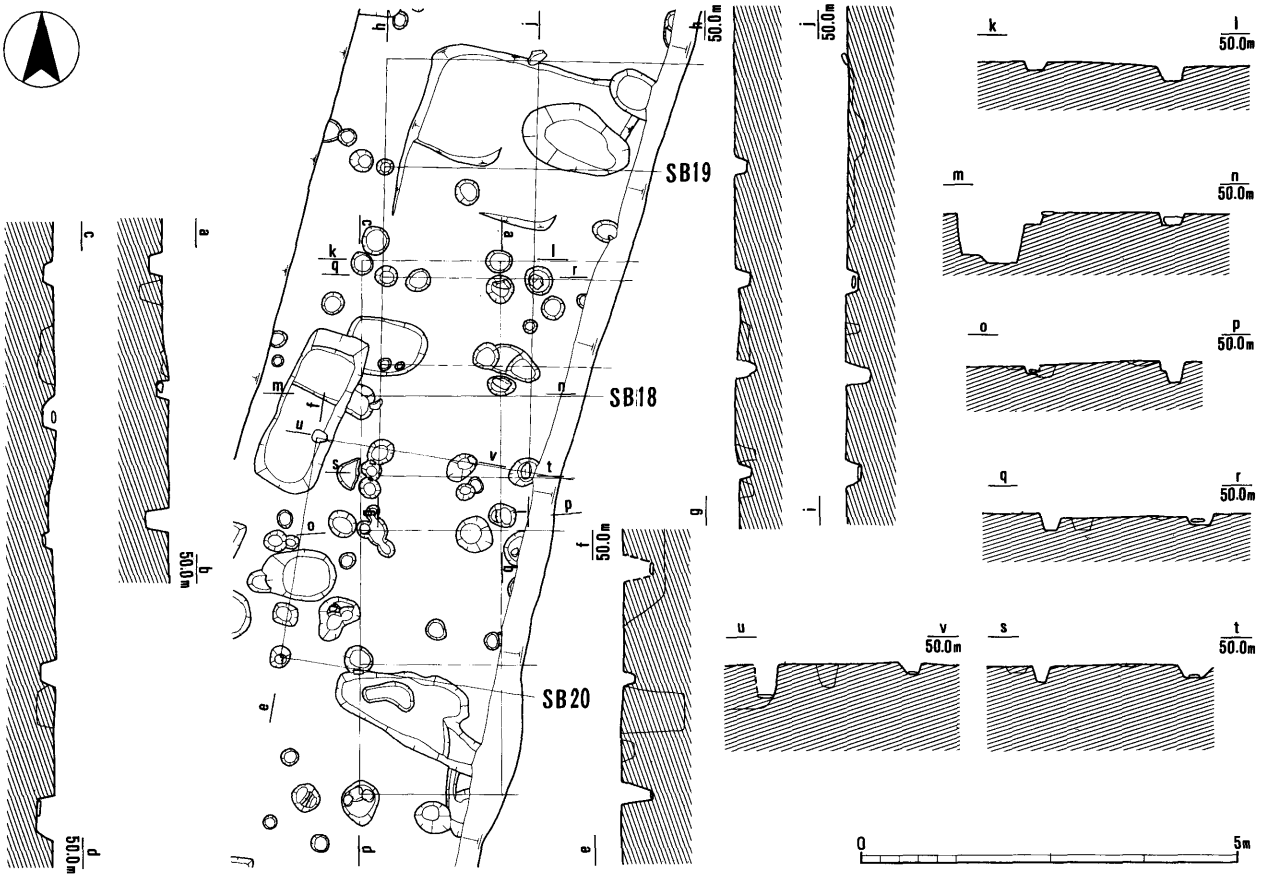
ＳＫ１（第７図）　Ａ地区南寄りに位置する。平面形はやや形の崩れた一辺約1.4ｍの方形で、検出面からの深さは0.5ｍである。数㎝～50㎝ほどの礫が多く出土したが、底面より浮いた状態である。出土遺物には、土師器鍋・羽釜・皿がある。土師器鍋は伊藤編年３段階ａ形式に相当するもので、他の遺物もこの時期に並行するものと思われる。したがって、14世紀代の遺構であると考える。

ＳＫ５（第７図）　ＳＫ３の北0.6ｍに位置する。平面形は一辺約１ｍの方形で、深さは検出面から約0.1ｍである。

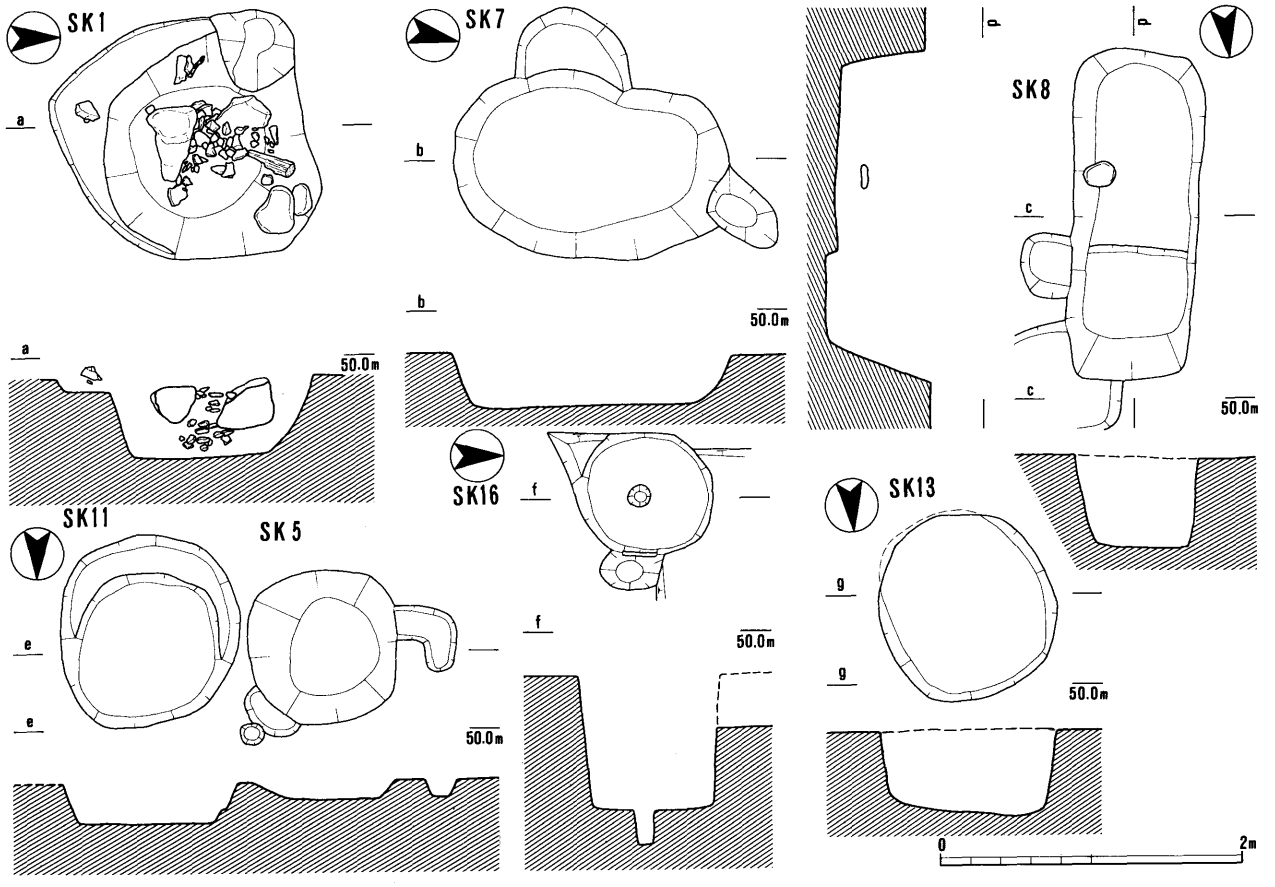
ＳＫ７（第７図）　ＳＫ５の西0.6ｍに位置する。平面形は長軸約1.8ｍ、短軸約1.2ｍの楕円形で、検出面からの深さは約0.4ｍである。土師器鍋・皿が出土している。土師器皿は伊藤編年Ⅲａ期のものに相当する。15世紀初頭の遺構であると考えられる。なお、壁が垂直に落ち、整った平面形をもつことから中世墓であるとも考えられる。

ＳＫ８（第７図）　Ａ地区の北寄りに位置する。平面形は長辺2.2ｍ、短辺0.8ｍの方形で、検出面からの深さは約0.6ｍである。整った形状であることから中世墓である可能性もある。出土遺物がなく時期は不明だが、切り合い関係からＳＢ20より古い遺構である。

ＳＫ11（第７図）　ＳＫ５の東に位置する。平面形は長辺1.3ｍ、短辺1.2ｍの方形で、検出面からの深さは約0.3ｍである。一部はテラス状になっている。伊藤編年３段階ｂ形式に相当する土師器鍋が出土している。したがって、15世紀前半の遺構と考えられ



第6図　SB18～20実測図（1:100）



第7図　SK1・SK5・SK7・SK8・SK11・SK13・SK16　実測図（1:50）

る。

ＳＫ13（第７図）　Ｂ地区南寄りに位置する。平面形は直径約1.2mの円形で、検出面からの深さは約0.6mである。遺物は無く、時期は不明である。整った形状であることから中世墓である可能性も考えられる。

ＳＫ16（第７図）　Ａ地区南寄り、調査区の西端に接する位置にある。平面形は長軸約0.9m、短軸約0.8mの楕円形で、検出面からの深さは約0.9mである。底面の中ほどに直径約10cm、深さ約25cmの小穴を持つ。形態は縄文時代のいわゆる「陥し穴」にも似るが、遺物の出土が無く、時期は確定できない。しかし、他の類例[5]との比較をすると「陥し穴」である可能性があることを指摘しておきたい。

遺構名	小地区	平面形	上面規模	深さ	時期	備考
ＳＫ1	b 25	方形	一辺1.4ｍ	0.5ｍ	14世紀代	
ＳＫ2	a 22	方形	一辺1.5ｍ	0.3ｍ		
ＳＫ3	b 19	方形	長辺1.0ｍ×短辺0.7ｍ	0.1ｍ		
ＳＫ4	b 25	不明		0.4ｍ		
ＳＫ5	b 18	方形	一辺1.0ｍ	0.1ｍ		
ＳＫ6	b 24	不明		0.2ｍ		
ＳＫ7	a 18	楕円形	長軸1.8ｍ×短軸1.2ｍ	0.4ｍ	15世紀初頭	中世墓か
ＳＫ8	a 20	方形	長辺2.2ｍ×短辺0.8ｍ	0.6ｍ		ＳＢ20より古、中世墓か
ＳＫ9	b 26	楕円形	長軸1.2ｍ×短軸1.0ｍ	0.4ｍ		
ＳＫ10	a 21	楕円形	長軸1.0ｍ×短軸0.7ｍ	0.8ｍ		
ＳＫ11	b 18	方形	長辺1.3ｍ×短辺1.2ｍ	0.3ｍ	15世紀前半	
ＳＫ12	b 19	楕円形	長軸1.4ｍ×短軸0.9ｍ	0.2ｍ		
ＳＫ13	a 13	円形	直径1.2ｍ	0.6ｍ		中世墓か
ＳＫ14	a 15	楕円形	長軸1.0ｍ×短軸0.9ｍ	0.1ｍ		
ＳＫ15	b 2	不定形	長軸2.7ｍ×短軸0.9ｍ	0.2ｍ		
ＳＫ16	a 24	楕円形	長軸0.9ｍ×短軸0.8ｍ	0.9ｍ	縄文時代？	底面に小穴、陥し穴か
ＳＫ17	a 8	不明		0.9ｍ		
ＳＫ21	b 23	方形	一辺0.9ｍ	0.1ｍ		
ＳＫ22	b 23	楕円形	長軸1.0ｍ×短軸0.9ｍ	0.1ｍ		
ＳＫ23	a 14	円形	直径0.7ｍ	0.1ｍ		
ＳＫ24	a 21	楕円形	長軸1.0ｍ×短軸0.7ｍ	0.2ｍ		

第１表　土坑一覧表

遺構名	小地区	規模	棟方向	根石	総柱	時期	備考
SB18	a 20～a 21 b 20～b 22	桁行4間×梁行1間以上	南北棟 N2° E	有	○	15世紀初頭	
SB19	a 19～a 21 b 19～b 21	桁行4間×梁行1間以上	南北棟 N3° E	有	○	15世紀前半	
SB20	a 20～a 21 b 20～b 21	桁行1間以上×梁行2間	東西棟 N78° W	有	×	15世紀前半	SK8より新

第2表　掘立柱建物一覧表

4　遺物

出土遺物は整理箱で9箱あまりである。そのほとんどは中世の土器である。大部分は小片であり、接合は困難を極めた。したがって、時期を確定できるような決め手となる遺物は少ない。

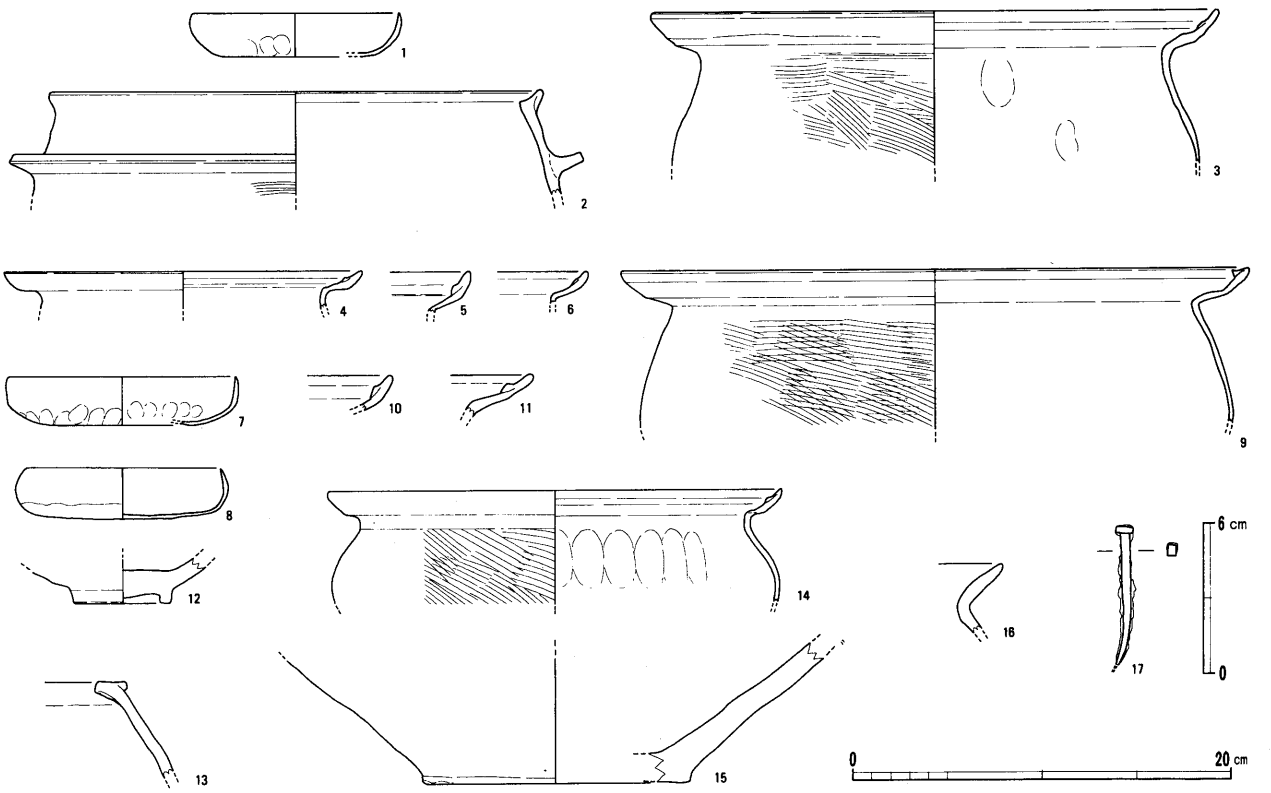
（1）中世以前の遺物

土師器甕(16)が出土している。口縁部が1点のみで、C地区包含層遺物である。直線的で短く立ち気味な口縁で、端部を丸くおさめている。古墳時代のものである可能性がある。

（2）中世の遺物

中世の遺物には土器類、鉄製品がある。土器類は土師器類・陶器・磁器がある。鉄製品は釘で、1点のみである。

土師器類　土師器には鍋・羽釜と皿がある。ほとんど全てが南伊勢系土師器である。また、土師器質の土錘がある。



第8図　出土遺物実測図（1～16は1:4、17は1:3）

鍋は伊藤編年２段階から３段階に相当するものが、皿はⅢａ期を中心とする時期のものが見られる。実年代にして13世紀後半から15世紀前半までのものと考えられる。

陶器　陶器には甕・擂鉢・山茶椀がある。いずれも小片のみであるため、15世紀代の常滑産甕(15)以外は図化しなかった。なお、山茶椀は尾張型と渥美型の第６型式ごろのものと思われる。[6]

磁器　磁器には青磁碗(12)と白磁皿と思われるものがあり、ともに中国産である。

鉄製品　断面長方形の釘(17)が１点ある。出土遺構はピットである。このピットは想定した建物が重複する地点にあり、建物に使われていた釘である可能性が高い。

報告番号	実測番号	器種等	出土位置 遺構	法量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	3－03	土師器 皿	b25 ＳＫ１	(口)11.0 (高) 2.3	外：オサエ・ナデのち口縁部ヨコナデ　内：ナデ	密～2.5mmの小石	良好	2.5Y8/2灰白	1/6	
2	2－03	土師器 羽釜	b25 ＳＫ１	(口)26.1	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	やや密～3mmの小石	良好	10YR7/3にぶい黄橙	口縁1/10	
3	2－02	土器器 鍋	b25 ＳＫ１	(口)30.2	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗～2mmの小石	良好	7.5YR8/2灰白	口縁1/8	外面煤付着
4	3－01	土師器 鍋	a22 ＳＫ２	(口)19.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	良好	10YR5/3にぶい黄橙	口縁1/8	
5	3－06	土師器 鍋	a18 ＳＫ７	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	良好	10YR8/3浅黄橙	口縁小片	
6	4－01	土師器 鍋	a18 ＳＫ７	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	良好	10YR8/2灰白	口縁小片	
7	3－02	土師器 皿	a18 ＳＫ７	(口)12.3 (高) 2.6	外：オサエ・ナデのち口縁部ヨコナデ　内：ナデ	密	良好	2.5Y8/2灰白	1/5	
8	5－02	土師器 皿	a18 ＳＫ７	(口)10.2 (高) 2.7	外：オサエ・ナデのち口縁部ヨコナデ　内：ナデ	密	良好	2.5Y8/4淡黄	完存	
9	2－02	土師器 鍋	b19 ＳＫ11	(口)33.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗～3mmの小石	良好	2.5Y8/3淡黄	口縁1/8	外面煤付着
10	4－03	土師器 鍋	b22 ＳＢ18	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	良好	10YR8/2灰白	口縁小片	
11	1－07	土師器 鍋	b20 ＳＢ18	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗～1mmの小石	良好	10YR8/3浅黄橙	口縁小片	
12	1－02	磁器 碗	Ａ地区 包含層	(底) 5.2	外：施釉・ケズリ出し高台　内：施釉	密	堅緻	N8/0灰白　釉) 7.5GY7/1明緑灰	高台完存	青磁　龍泉窯系
13	1－04	土師器 羽釜	b21 包含層	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗	良好	10YR8/3浅黄橙	口縁小片	
14	5－01	土師器 鍋	b19 表採	(口)24.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ・オサエ	やや密～2mmの小石	良好	2.5Y8/4淡黄	口縁1/5	外面煤付着
15	1－01	陶器 甕	b18 包含層	(底)14.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗～1mmの小石	良好	7.5YR6/2灰褐 10YR7/1灰白	底部1/8	常滑
16	1－05	土師器 甕	b2 包含層	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗	良好	10YR8/3浅黄橙	口縁小片	古墳時代か
17	5－03	鉄製品 釘	b21 Pit1	(長) 5.6	断面長方形	－	－	－	ほぼ完存	

第３表　遺物一覧表

Ⅳ　結　語

今回の調査は、幅４ｍほどという幅の狭い調査区であるという制約があった。しかし、14・15世紀を中心とする遺物とともに、掘立柱建物３棟をはじめ、いくつかの土坑を確認することができた。

また、同時に行った分布調査では集落全体での遺物散布を確認した。地形も考慮に入れて考えると、従来の柳原観音境内遺跡（町№77）を含めた集落全体が遺跡であり、不可分のものであると判断した。今後は柳原観音境内遺跡を廃止し、森ノ上遺跡とするのが妥当だと考える。

１　中世以前の森ノ上遺跡

今回の発掘調査では、中世以前のものと思われる遺物は１点のみであった。古墳時代のものと思われ、近辺に同時代の遺構の存在を示唆するものであろう。

ＳＫ16は陥し穴とも考えられ、縄文時代の遺構である可能性もある。また、表採遺物にチャート製の石器剝片がある。採集地点は今回の調査区より東に100mほどの旧柳原観音境内遺跡内である。この場所は宮川にむかって緩く張り出した段丘上であり、旧石器～縄文時代の遺構・遺物の存在する可能性がある。

２　中世の森ノ上遺跡

遺物は14世紀代を中心とし、13世紀後半から15世紀前半までの時期に限られるようである。したがって、今回確認できた遺構もこの頃のものと考えている。遺構間の時期差は、決め手となる材料が少ないため確定できないが、強いて言えば、いくつかの土坑は掘立柱建物に先行するものであると考えられる。

ＳＫ８を例に考えてみると、その位置関係からはいずれの掘立柱建物にも伴わない遺構であると考えられる。また、切り合い関係から掘立柱建物より先行する遺構である。ところで、ＳＫ８はその形状から中世墓である可能性を考えている。また、周囲にも同様のものが多く、中世墓群であった可能性もある。もし、そうだとすれば、ＳＫ８ができてさほどの年月を経ずに掘立柱建物ができたとは考えにくく、ＳＫ８と掘立柱建物との時期差はある程度の開きがあると考えざるを得ない。

森ノ上遺跡の範囲は現集落のほぼ全域に広がっており、13世紀代の山茶椀や14世紀から15世紀の土師器鍋などを採集することができる。今回の調査はこの広範な遺跡の一部を調査したに過ぎない。しかし、少なくとも調査区内には15世紀初めを中心とする生活の跡があること、また、それに先行するＳＫ８の時期の生活の跡があろうことが確認できた。

森ノ上遺跡内は中世以降も熊野街道が通り、人々の往来が盛んだったことは想像に難くない。しかし、調査区内ではＣ地区の現代のものを除き、中世以降の遺構・遺物は全くといってよいほど確認できなかった。

このような立地の遺跡は現在の集落と重複する部分が多く、全体が明らかになりにくい。しかし、部分的な成果であっても、資料の蓄積により大きな成果に結びついていくことであろう。

［註・参考文献］

① 木村一朗「出張遺跡・栃原附近の地形と地質」（『出張遺跡調査報告書』、大台町出張遺跡調査会、1979年）。

② 三ツ木貞夫他『出張遺跡調査報告書』（大台町出張遺跡調査会、1979年）。

③ 西出　孝『内垣外遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。

④ 伊藤裕偉「南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）。

伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

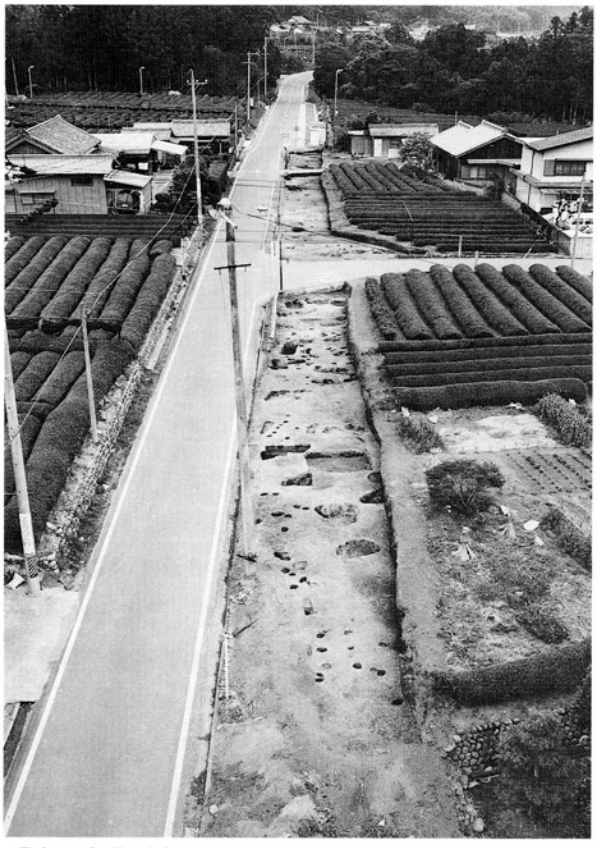
⑤ 霧ヶ丘遺跡調査団『霧ヶ丘』（武蔵野美術大学考古学研究会、1973年）。

伊勢野久好「馬ノ瀬遺跡の調査」（『天花寺山』、一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）。

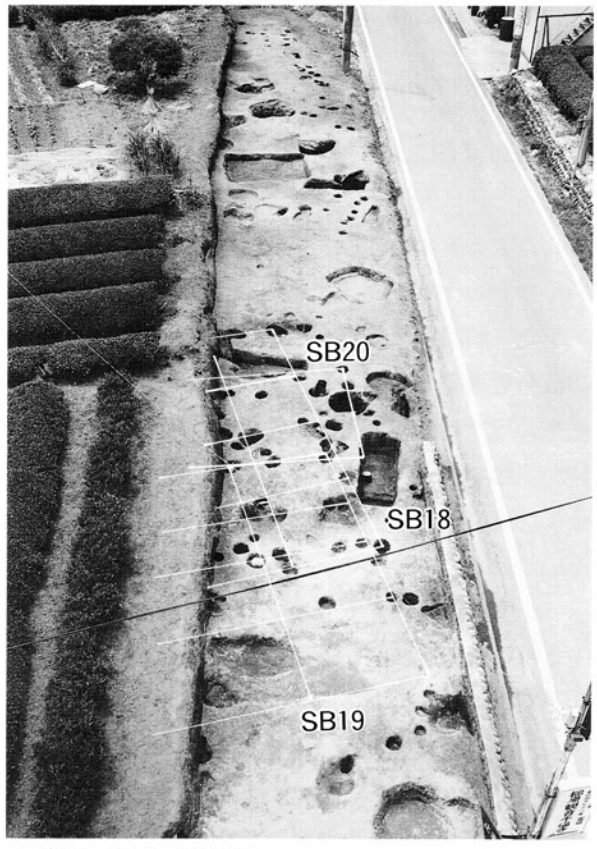
西出　孝『奈可切遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑥ 藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

上記の他、前川嘉宏「蚊山遺跡左郡地区」［『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第6分冊、三重県埋蔵文化財センター、1993年］を参照した。



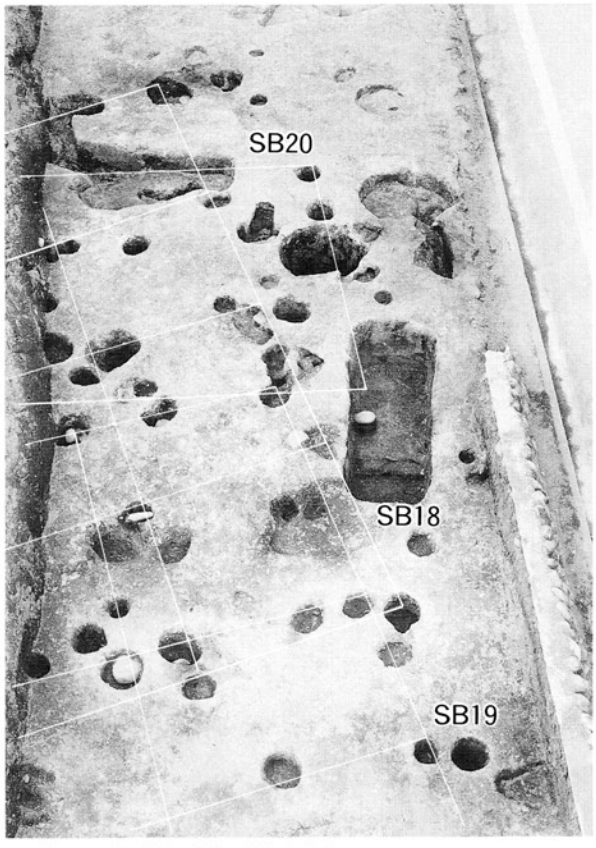
調査区全景（南から）



A地区　全景（北から）

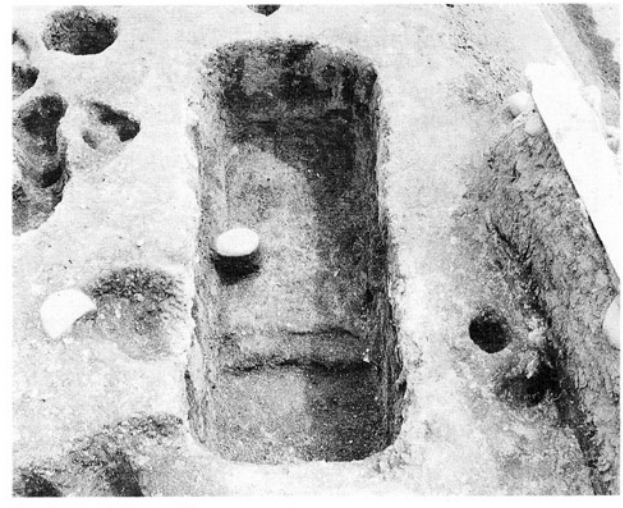
B地区　全景（北から）

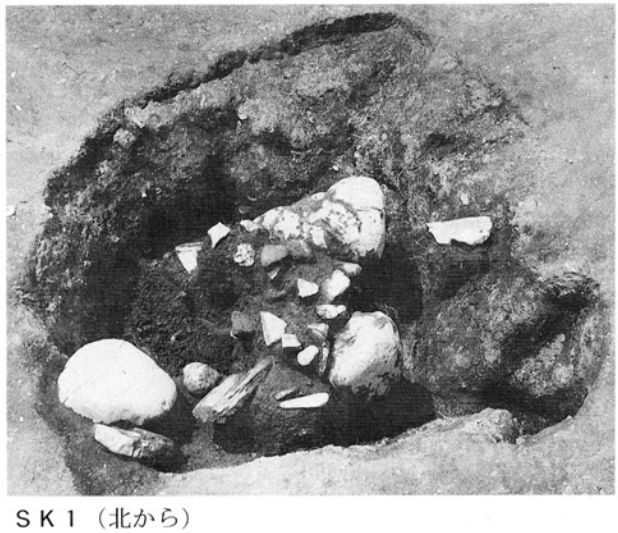
C地区　全景（北から）

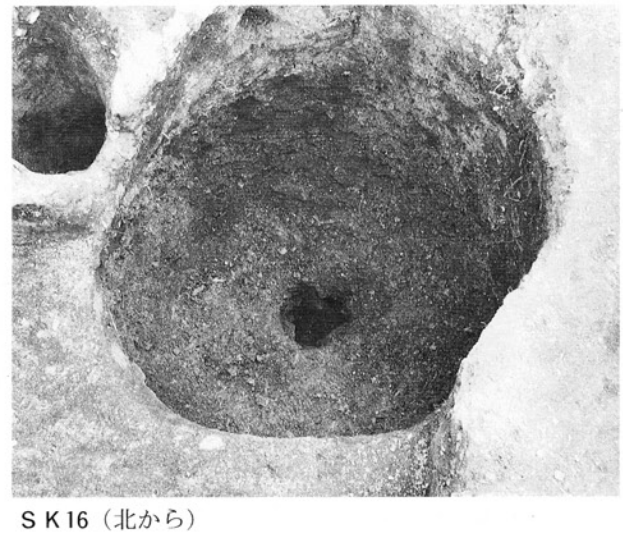


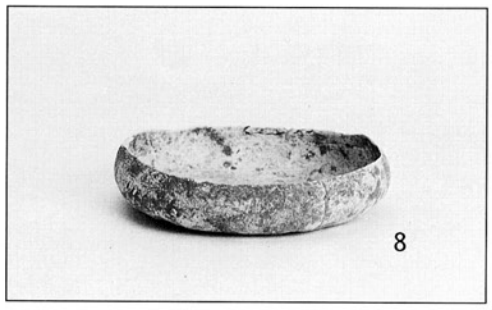
A地区　掘立柱建物（北から）

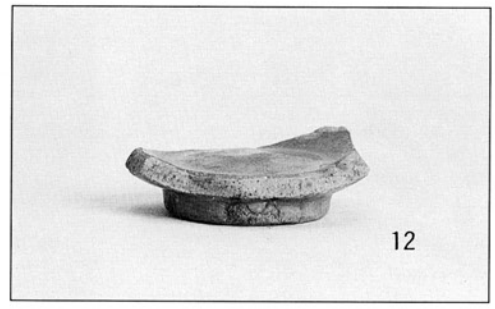
ＳＫ７（北から）

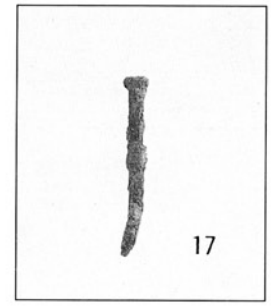

ＳＫ８（北から）

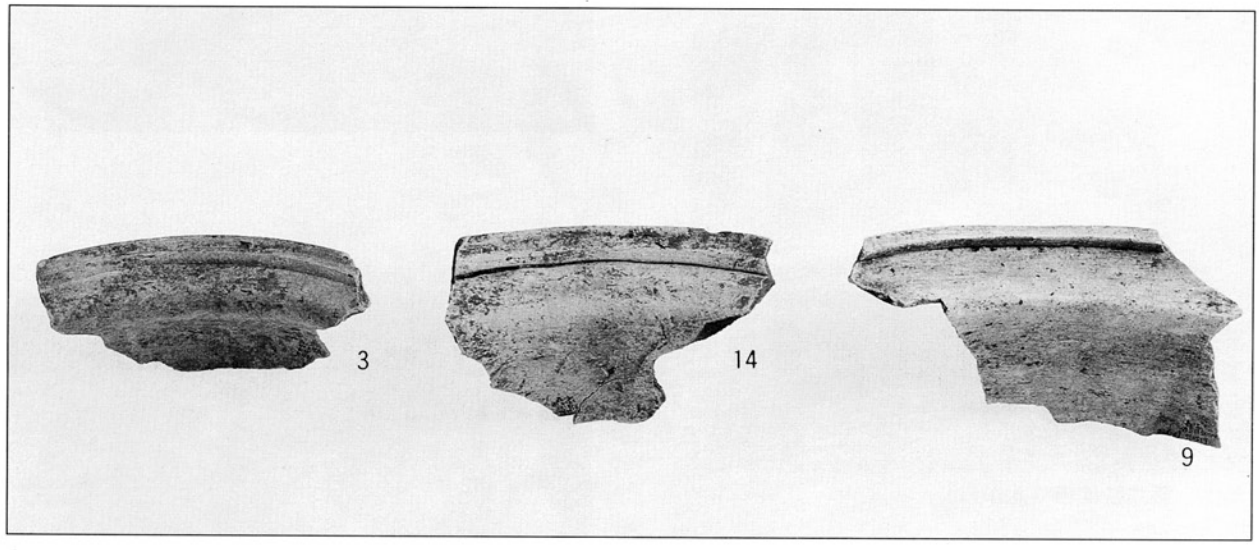

ＳＫ１（北から）

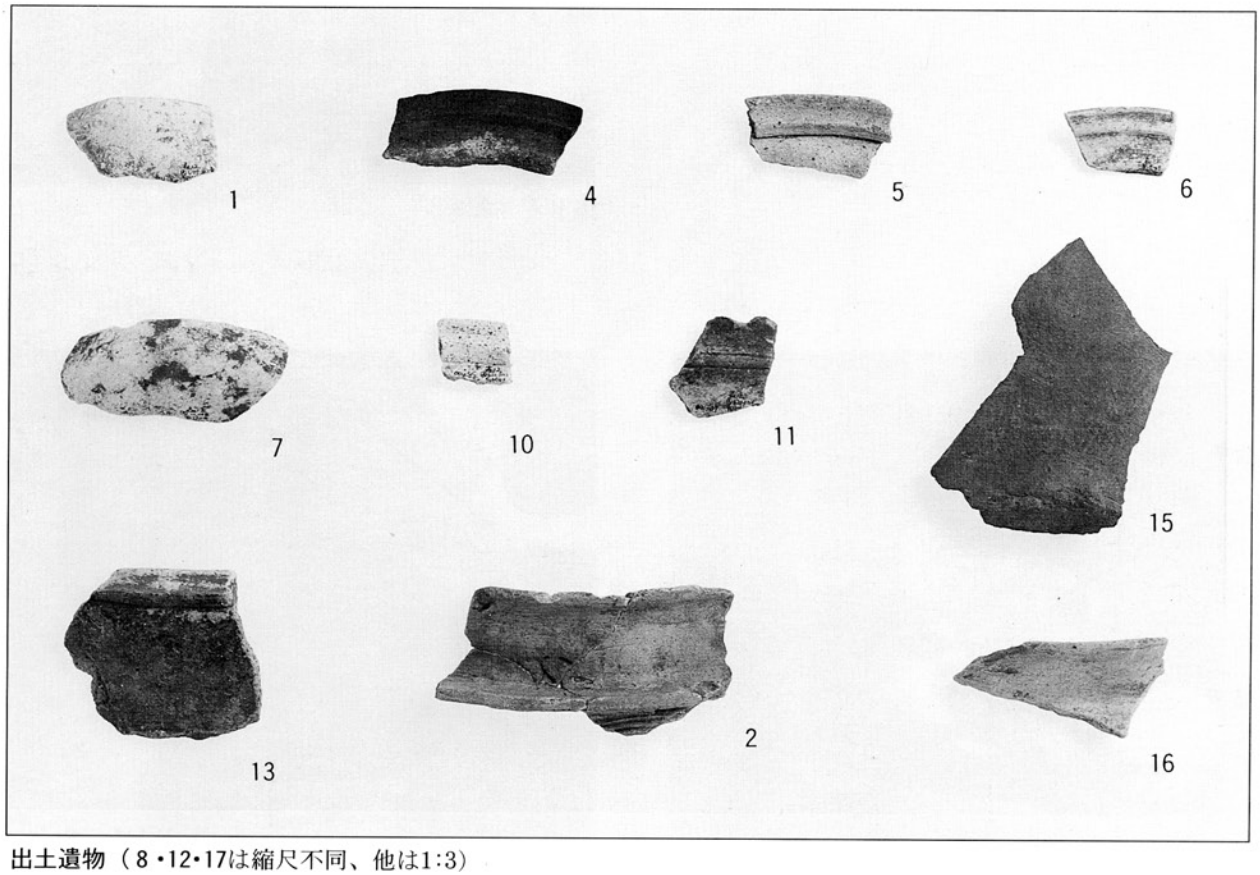

ＳＫ16（北から）











出土遺物（8・12・17は縮尺不同、他は1:3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	もりのうえいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	森ノ上遺跡発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１５８
編著者名	松葉　和也
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川５０３　TEL05965－2－1732
発行年月日	１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
もりのうえいせき 森ノ上遺跡	みえけんたきぐんおおだいちょうやなぎはらあざもりのうえ 三重県多気郡大台町柳原字森ノ上	24443	85	34° 26′ 24″	136° 32′ 53″	19960507 ～ 19960610	400	県道相鹿瀬大台線 道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森ノ上遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物・土坑	土師器皿・鍋・羽釜、山茶碗、青磁碗、土錘	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告158

森ノ上遺跡発掘調査報告

－三重県多気郡大台町柳原－

1997年3月
編集発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲第一プリント社